ニーチェにおける心の発見

湯田　豊

序論

〝汝自身を知れ！〟という格言は、古代ギリシアにまでさかのぼる。けれども、古代ギリシアの哲学者たちが自己自身について深く知っていた痕跡は見いだされない。古代インドにおける哲学のルーツは、ウパニシャッドという名の哲学的小冊子のなかに存在する。この小冊子における主要テーマの一つは、〝本来的自己〟(アートマン)である。しかし、ここにおいても、われわれ自身あるいは人間の心が深く探究されているようには思われない。人間の心とは何かというテーマは、現在においても未解決の大きな問題である。今まで、人々は多くの問題を解決しようと努力して来た。しかし人間の心は、われわれ自身にとってさえ、依然として暗黒の大陸である。

さて、われわれによって心という名の未知の世界が探究されねばならないとすれば、まず最初に、〝心〟によって何が意味されるかについて、われわれは考察しなければならないであろう。〝心〟という言葉を聞いてわたくしが最初に連想するのは、英語の *mind* である。心ないし mind は感情、知性、理性、情緒、知覚、意思、思想および無意識を包括する言葉づかいである。しかし〝心〟に関して言語的穿さくに没頭するのは非生産的である。心あるいは mind という言葉の語源を研究し、この語の言語的分析を試みることは、人間の心を発見するのに何ひとつ寄与しないからである。言語分析を通じて人間の心を知ることは出来ない。われわれが人間の心を探究する際に、心という言葉――あるいは mind ないし Geist――を主要な手掛りにして未知の大陸に上陸しようとする試みは、サルトル流に言えば〝無益な情熱〟である。

かつてヘーゲルは「人間の真の存在は、彼の行為である」(das wahre Sein des Menschen ist seine Tat)と言った。ある

いはまた、「しかし行為は、現実の自己である」(die Tat aber ist das wirkliche Selbst)と、彼は述べている。ヘーゲルによれば、人間とは彼の行為であり、彼の行為のシリーズである。人間は彼の行為であるという考え方を発見したのは、ヘーゲルではなくむしろゲーテである。人間のなかに本質があるという考えは、西洋哲学史[1]においては、プラトンおよびカントによって特に擁護されている。プラトンは英知界(イデアの世界)および感性界(この世)という二つの世界を認め、カントは〝物自体〟および〝現象界〟という二つの世界を容認した。カントによれば、本体としての自己および経験の世界という二つの世界が存在する。しかるにゲーテは、プラトンおよびカントの二つの世界と共に、人間は本質を有するという考えそのものを否定してしまった。しかしながら、一旦、本質が否定されてしまえば、あとに残るのは人間の活動あるいは行為だけである。ウパニシャッドにおいては、本来的自己は自己自身の究極の超現象的自己に他ならない。しかし、このような〝自己〟は、ゲーテ流に言えば、現象のかなたの、あるいはそれの背後の本質である。ある事物、あるいは、ある人間の本質を表現することが無益であるとすれば、ウパニシャッド的なアートマンはフィクションであるという結論が得られる。現象とは別に本質は存在しないというゲーテの洞察をわれわれが受け入れれば、身体を離れた心あるいは本質としての心は存在しないと、われわれは言わざるを得ない。

もしも、われわれがある人の心を知ろうとすれば、われわれはその人によって言われることおよびなされることを知りさえすればいい。人が言うことおよび行なうことを除いて、われわれは人間の心を知る術を持たない。ヘーゲルの言うように、まさに「人間の真の存在は、彼の行為である」。

すでにわたくしによって言われたように、心という語の英語の相当語句はmindである。ドイツ語のそれは、カント流に言えばGemütであろう。一般に、ドイツ語において心に対応する語はガイストGeistであろう。精神分析の父フロイトは、心を表現する言葉としてゼーレSeeleを使用した。ゲーテおよびシラーはガイストの存在を信じていないのに、この語を使用した。彼らにとって、それは科学的な術語であるよりも、むしろ詩的な言葉づかいであった。

フロイト[2]は人間の心的なプロセスを説明するためにSeeleという語を用いたが、Seeleというものの実在を彼は信じていたわけではない。結局、彼にとって心そのものは存在しないのである。しかし心を発見する道は、感情と情緒、思考と欲望、夢と行為を研究することである。このような心の発見においてもっとも偉大な業績を残したのは、ニーチェではなくフロイトその人である。

心は存在しない。つまり実体、本質、あるいは事物としての心は在存しない。心とは、人間によって言われたこと、感じられたこと、考えられたこと、あるいはなされたことなど、要するに、一切の現象に対する一つの名前、あるいは記号にすぎない。そして時間のなかに存在するのが人間の運命である。われわれは暫くこの世に生き残り、間もなく死ぬ。老いて朽ち、そして死ぬこと――それ以外に人間の生き方はあり得ない。われわれは生まれて老い、病いを得て死ぬ――このようにブッダは説いた。時間のなかに存在するのが人間の定めであるとすれば、われわれはこのように死への途上にある人間存在をその発展の相において、あるいはその変化の相において理解すべきであろう。まさに変化こそ、この世における事物の成り行きである。現象的な自己の背後、あるいは、それのかなたにある、変化することのない心――そのような何かあるものを、われわれは放棄すべきである。カントは、心の無時間のパラダイムを信じていた。しかし、このようなパラダイムを徹底して否定したのが、ゲーテ、ヘーゲル、ニーチェ[3]およびフロイトである。ゲーテに従って、ニーチェはわれわれの内部のどこかに隠されている本質を人間が持っているに違いないという考えを否定した。カント的な無時間の心の構造はわれわれ自身の内部だけでなく、全現象界の背後にも見いだされないというのが、ニーチェの洞察であった。おそらく、人間には自己は存在しないであろう。おそらく、個人には本質、あるいは本性は存在しないであろう。もしも、そのようなものが存在するとすれば、それを克服するのが人間の課題でなければならない――ニーチェはこのように考えたのである。

真の自己は現象の背後に隠されている、というのがカントの考えである。デカルトは物質と心の二元論を信じてい

た。そして、プラトンは現象とイデアを区別し、二つの世界を説いた。そしてプラトンのこの思想のルーツは、〝身体は魂の墓あるいは牢獄である〟というオルフェウスの学説のなかに求められよう。プラトンないしカントによって代表されるような西洋哲学の伝統に挑戦したのはニーチェである。身体を蔑視して精神の優位を説くヨーロッパ的な伝統を、ニーチェは根底から覆した。現象の背後に隠れているかもしれない本体としての自己の存在を、ニーチェは決して信じなかった。そして、このニーチェの遺産を相続したのがフロイトである。心を発見しようとする人は、まず最初に、心なるものが存在しないことを知らねばならない。確かに、これはパラドックスである。しかし、人は真理に耐える勇気を持たねばならぬ。人間とは何か？　人間とは優れて彼あるいは彼女の行為および行為のシリーズである。人間の心を知ろうとすれば、われわれは死への途上にある人間の言行をその発展においてとらえるべきである。言葉の蜘蛛の巣にとらえられる代わりに、われわれは人間の言行を時間の流れにおいて理解すべきであろう。

1　意識は表面である

ニーチェは哲学者であり、反キリストであり、詩人であり、音楽家であり、そして一人の魅惑的な人間である。しかしながら、ニーチェは優れて心理学者である。[4] もちろん、彼は体系的な心理学の学説を編み出さなかったけれども、彼はその著作において多くの心理学的な洞察をしている。ニーチェの心理学的洞察を理解しなければ、われわれは彼の哲学を正しく評価することは出来ないであろう。ニーチェ自身、彼の著作においてみずからを心理学者とみなしている。『エッケ・ホモ』(「なぜ、わたくしは運命なのか」6)において、ニーチェは「わたくし以前には、まだ全然心理学は存在しなかった」と宣言している。しかし、ニーチェのこの自己評価は決して間違っていない。フロイト自身、ニーチェのこの主張を支持しているように思われる。フロイトは多くの箇所(例えば、*Gesammelte Werke*, XIV, p. 86)におい

て、彼の「予感および洞察は、しばしばもっとも驚くべき仕方において精神分析の骨の折れる成果と一致する」と言い、ニーチェを繰り返し繰り返し絶讃している。フロイトの忠実な弟子であったアーネスト・ジョーンズは、『ジークムント・フロイト　生涯と著作』(第2巻、三八五ページ)という伝記において、次のように述べている――「しかし彼はニーチェについて幾度も次のように言った――彼は今まで生きていた、あるいはこれから生きる見込のあるどんな人間よりも、もっと洞察力のある自己認識を有していた」と。このようにフロイトは、ニーチェを〝ヨーロッパの最初の心理学者〟(ニーチェ自身の言葉)とみなしていたのであり、ニーチェにおけるような内省は以前にどんな人間によっても到達されなかったし、これからも到達されないであろうと評したのである。フロイトの心理的洞察の幾つかは、すでにニーチェによって発見されていたのであり、フロイト自身このことを十分に知っていた。以下において、ニーチェの心理学への二、三の寄与を示し、どのように彼が人間の心を理解していたかに関して、わたくしは簡明にスケッチしてみたい。

われわれの精神生活において意識が過大評価されていることを、ニーチェは繰り返し繰り返し指摘する。意識ではなく、それの根底に横たわっている無意識がわれわれの生活において決定的であるという精神分析的思考は、すでにニーチェによって先取りされているのである。ニーチェは、フロイトのように〝無意識〟(das Unbewußte)という語をキー・ワードとして使用していないけれども、彼が深層心理の発見者であるという事実は否定され得ないであろう。『エッケ・ホモ』(「なぜ、わたくしはそんなに利口なのか」9)において、彼は次のように言っている――「意識の全表面――意識が表面であること――はすべての大いなる命令から遠ざけられるべきである」と。〝意識は表面である〟(Bewußtsein *ist* eine Oberfläche)という彼のこの表現は、ニーチェ流の抑圧の理論の公式とみなされてよいであろう。彼のこの公式は、フロイトによって『日常生活の精神病理学』において紹介されている。本書(*Gesammelte Werke*, IV, p. 162)において、フロイトは次のように言っている――「しかし、ニーチェが彼のアフォリズムの一つ(『善悪のかな

たに』第2章、セクション68)においてなした――「わたくしはそれをした」と、わたくしの記憶は言う。「わたくしはそれをしたはずはない」とわたくしのプライドは言い、情容赦のないままである。最後に、わたくしの記憶が屈する――ようにそのように余すところなく、そして同時に印象深くこの現象およびそれの心理学的な理由づけを叙述することの出来た人は、われわれのなかに一人もいないのである」と。同じことを、フロイトは他の箇所(*Gesammelte Werke*, VII, p. 407)でも述べている。

もしも〝意識は表面である〟ことが認められれば、意識そのものが高く評価されるはずはないのである。それゆえに、ニーチェは意識を「もっとも貧弱な、そして、もっとも誤りを犯しやすい器官」(『道徳の系譜』II・16)とみなしている。しかしながら、われわれの意識が意識下の深層に追放され抑圧されることを、ニーチェは明らかに見てとった。しかし、それと同時に、彼は外へ向けられない意識が内面に向けられることをも洞察したのである。「有限ならびに無限な分析」(*Gesammelte Werke*, XVII, p. 90)においてフロイトが「原始人から文明人への発展の途上において非常に多大な攻撃の内面化、内側へ向けられることが起こるのであり・・・」と言う時、わたくしはニーチェのあの有名な文句――「外へ放出されないすべての本能は、内へ向けられる、すなわち、これが、わたくしによって人間の内面化と名づけられるものである」――を挙げざるを得ない。ニーチェによって〝人間の内面化〟(*die Verinnerlichung*)と名づけられるものは、わたくしにフロイトの術語 *Verinnerlichung* を思い出させるのである。(5)

意識は表面であるというニーチェの考えを例証するものの一つとして、一八八六年に『善悪のかなたに』が出版される前に公にされた彼の『夜明け』のなかの一つのセクション(119)にほんの僅かだけ触れたい、とわたくしは思う。〝体験およびフィクション〟というテーマのこのセクションにおいて、ニーチェはわれわれに非常に重要な問いを投げ掛ける。このセクションにおいて、彼は「覚醒および夢の間に本質的な相違はないのであろうか?」と問い、更に次のように言う――「われわれの道徳的な判断および評価もまた、われわれに知られていない生理学的な事象に関す

るイメージおよび幻想、ある種の神経的な刺激を示すのにわれわれが慣れている一種の言語にすぎないのであろうか？」と。引き続きニーチェは「すべてのわれわれの、いわゆる意識は、知られていない(ungewussten)、おそらく知ることは出来ないが、感じられているテクストに対する多かれ少なかれ幻想的な注釈なのであろうか？」と言うのである。そしてこのセクションの最後において、ニーチェは次のように結んでいる――「それでは、われわれの体験とは何なのか？　そのなかに横たわっているものよりも遥かにより多く中へ入れること！　あるいは、そのなかには、それ自身において何ひとつ横たわっていないのか？　体験は一つのフィクションなのか？　と、人は本当に言わねばならないのか」と。人間の体験のなかにはそれ自身において何ひとつ横たわっていないということ、およびわれわれの体験は原理的にわれわれの見る夢と異ならないフィクションであるということが、〝体験およびフィクション〟におけるニーチェの趣旨であろう。〝体験はフィクションなのか？〟(*Erleben ist ein Erdichten?*)という彼の問いは、意識は表面であるという彼の考えを間接的に確証するように思われる。「覚醒および夢の間に本質的な相違はない」というのが、ニーチェの基本的な考え方である。

〝意識は表面である〟というニーチェの示唆は、『このようにツァラトゥストラは語った』における次の文句との関連において理解されるべきである。『ツァラトゥストラ』のなかの〝身体の軽蔑者について〟というセクションにおいて、ニーチェは次のように語るのである――

「わたくしは身体であり、そして魂である」――このように、子供は語る。そして、なぜ、人は子供のように語るべきではないのか？

しかし目覚めているもの、知っているものは言う――わたくしは完全に身体であり、そして、その他の何ものでもない。そして魂は、身体における何かあるものに対する言葉にすぎない。

身体は大いなる理性である・・・

あなたの身体の道具もまた、わたくしの兄弟よ、あなたが〝精神〟と呼ぶ小さな理性であり、あなたの大いなる理性の小さな道具およびおもちゃである。

〝わたくし〟とあなたは言い、この言葉を誇りにしている。しかし、それをあなたが信じることを欲しないもの――あなたの身体およびそれの大いなる理性が、より大いなるものである。それは〝わたくし〟と言わないで、〝わたくし〟を行なう。

感覚器官が感じるもの、精神が認識するものは、決してそれ自身のなかにそれの終わりを持たない。しかし、感覚器官および精神は、それらがすべての事物の終わりである、とあなたを説得したいと思っている。それらは、そんなにうぬぼれている。

感覚器官および精神は道具であり、そしておもちゃである。それらの背後に、まだ自己が横たわっている。自己はまた感覚器官の眼を以て求めるが、それはまた精神の耳を以て聞く・・・それは支配し、〝わたくし〟の支配者でもある

あなたの思想および感情の背後に、わたくしの兄弟よ、強力な命令者、未知の賢者がいる――彼は自己(Selbst)と呼ばれる。あなたの身体のなかに彼が住んでいる、彼があなたの身体である。

ここで〝わたくし〟(Ich)と呼ばれるものは、自己の一部としての単なるエゴ、すなわちフロイトによってIchと名づけられる概念のルーツである。しかしながら、ニーチェの自己(Selbst)は、精神ではなく〝身体〟(Leib)である。ウパニシャッドないしヴェーダーンタ哲学においては、本来的な自我あるいはアートマンは身体ではなく本質的に精神であるとみなされている。しかるにニーチェは、本来的自己を人間自身の身体に他ならない、と大胆に宣言した。ニー

チェは反プラトン的である。身体は魂の牢獄ではない――このように、ニーチェは考えた。ニーチェは、反キリストである。「ローマ人への手紙」7・18―19において、聖パウロは次のように述べている――「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意思は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている」、と。身体が弱くて邪悪であるのに反して、精神は善良であり欲しているというパウロ的ないしキリスト教的な考え方を、ニーチェは徹底して否定した。あなたの最良の知恵におけるよりも、もっと多くの理性があなたの身体のなかにあるというニーチェの心理的洞察は、心理学に対する彼の大きな寄与である。人間の心を知るためには、われわれは彼あるいは彼女の身体を一つの重要な鍵として、身体をいわば導きの糸として利用することが必要である。身体は豊かな現象であり、それは古い魂よりももっと驚異的な思想であるというニーチェの思考方法は、人間の深層心理への道を示すものとして注目に値する。われわれは身体に苦痛を感じる。これは非常に有益な危険信号である。もしも、われわれが身体に少しも苦痛を感じなければ、何が起こるであろうか？　この問いに対して、もしもそうなれば、われわれは健康に恵まれ、永遠に生きることが出来るかもしれない、とこのように答える人がいるかもしれない。しかし苦痛は、身体によってわれわれの意識に送られる警報である。身体のこのシグナルに耳を傾けない人には、健康、いや、生命を失う危険さえあるのである。

結局、ニーチェによれば、すべてのわれわれに知られている(＝意識されている)動機は表面の現象である。それらの現象の背後に、われわれの衝動および状態の闘争――力のための闘争が存在する。今や、心の発見との関連において、われわれは、ニーチェの〝力への意思〟(Wille zur Macht)についてスケッチしなければならない。

2　力への意思

人間の心を発見する上で重要なのは、ニーチェの場合〝力への意思〟である。『このようにツァラトゥストラは語った』という彼の主著のなかで、ニーチェは〝千および一つの目標について〟の章において〝力への意思〟に初めて言及した。力への意思が何かを、われわれは確定しなければならない。なぜなら、それは彼の哲学において中心的であるからである。『ニーチェ』(一九六一年。二巻)において、マルティン・ハイデガーはニーチェを西洋の最後の偉大な形而上学者とみなし、力への意思を形而上学的な概念としてとらえたのである。しかし、私見によれば、このようなニーチェ解釈は基本的に間違っている。ショーペンハウアーの〝盲目的意思〟は疑いもなく究極的実在であり、明らかに形而上学的な概念である。ショーペンハウアーによれば、意思はカントの〝物自体〟(Ding an sich)と同一であり、それは現象界のかなたに横たわる究極の実在である。そしてショーペンハウアーの盲目的意思は、カントおよびプラトンの形而上学と同じく、二つの世界説に基づいている。しかるにニーチェは、プラトン、カントおよびショーペンハウアー的な究極の実在も、あるいは、そのような思考の根底に横たわっている二つの世界説も認めないのである。ニーチェの〝力への意思〟は、ハイデガーの言うような基本的に形而上学的な概念ではない。

ニーチェによれば、現実は根底において欲しつつあること、志向しつつあること、欲求しつつあることである。本質において、それは意思に他ならない。しかしニーチェによって評価されるのは、生への意思ではなく力への意思である。それでは、力への意思とは何か?——この問いに答える前に、〝千および一つの目標について〟のなかから、わたくしは僅かの文句を引用しよう。そのなかでニーチェは次のように言う——「善の銘板がすべての民族の頭上にぶら下がっている。見よ、それはそれらの民族の克服の銘板である。見よ、それは、彼らの力への意思の声である。あ

る民族にとって困難であると思われるものは賞讃に値する。不可欠でしかも困難であると思われるものは善良であると言われる。最大の苦難からさえ解放してくれるもの、稀なもの、もっとも困難なもの――それを人々は神聖であると言う」と。困難なことを成し遂げることが、ニーチェによれば最高の価値である。そして、もっとも困難なことは、自己自身を克服することである。それゆえに、ニーチェの力への意思は自己自身の克服と不可分に結び付けられる。『ツァラトゥストラ』において、力への意思は自己自身を克服しようという意思として導入されたのである。『ツァラトゥストラ』第2部の〝自己克服について〟というあの有名な章において、ニーチェは力への意思に関して次のように述べているのである――

わたくしが生きているものを見いだしたところ、そこにわたくしは力への意思を見いだした。そして、仕えている人の意思のなかにさえ、わたくしは主人であろうとする意思を見いだした。

より強い人により弱い人が仕えるのは、もっと弱い人の主人になろうとする、それ自身の意思によってそれが説得されるからである・・・

更に、この同じ章のなかで、ニーチェは次のように言っている――「ただ、生命のあるところ、そこに意思もまたある。しかし、それは生への意思ではなく、――そのように、わたくしはあなたに教える――力への意思である。生きているものが生そのものよりも、もっと高く評価するものは沢山ある。しかし、この評価自身から、力への意思が語るのである」と。ニーチェは他人を服従させるよりも、むしろ自己自身を克服することのなかにより多くの力を見いだした。それゆえに、彼はたった今わたくしによって引用された章のなかで、「わたくしは、常にみずからを克服しなければならないものである」(Ich bin das, was sich immer selber uberwinden muss.)と宣言したのである。

もしも自己克服を行なおうとする意思が〝力への意思〟であるとすれば、われわれは何を克服すべきであろうか？最高の力は、自己の衝動(Triebe)を支配し得る能力である。『善悪のかなたに』(セクション36)におけるニーチェの発言は重要である。このセクションの冒頭において、欲望および情熱というわれわれの世界以外の他のものは、何ひとつ〝与えられていない〟と、彼は想定している。彼にとって、現実とは、〝われわれの衝動〟の現実そのものである。衝動、あるいは〝欲動〟から完全に独立した、あるいはそれらよりも高次の精神性およびモラルの領域が存在するというのが、ヨーロッパのキリスト教文明の基本的な考え方である。欲望および情熱――要するに、衝動――以外に何ひとつ与えられていないというニーチェの想定は、キリスト教文明ないし宗教一般に対する挑戦であり、それはフロイトの衝動の理論に対して道を開くと言えよう。

さて、同じセクションの最後の部分において、ニーチェは次のように述べている――

> 最後に、次のように想定しよう――わたくしの命題がそれを持っているように、われわれの全衝動生活を意思の一つの基本形態――すなわち力への意思の形態および分岐として説明するのにわれわれが成功すれば、すべての有機的な機能を人がこの力への意思に還元することが出来るとすれば・・・その時に、人はそれと共にすべての効用を生じる力を一義的に力への意思として決定する権利を手に入れたことであろう。内部から見られた世界、それの〝叡知的な性格〟に従って決定され、特徴づけられている世界――それは、まさに〝力への意思〟であり、それ以外の何ものでもない。

人間の衝動あるいは欲動を支配し、それらを昇華することが、ニーチェの課題であると言えよう。そして、われわれの衝動が力への意思に還元され得ることを、ニーチェはたった今わたくしによって引用された『善悪のかなたに』(6)

（セクション36）において示唆している。フロイトによって昇華の理論が編み出されたが、〝昇華する〟(*sublimieren*)という語は、すでにニーチェによって使用されている。力への意思は、自己の衝動をコントロールし、昇華し、そして創造的に使用する点にある。フロイトによれば、すべての心理的エネルギーは最後にリビドーにまでさかのぼる。そして、それの根源的な（性的な）目標が許容されない時には、それは昇華の無意識の過程によって非セックス的な目標へ向けられる。『人間的な、あまりにも人間的な』（II「混ぜられた意見および格言」95）において、ニーチェは愛(*Liebe*)をテーマにして次のように言っている――「そして、両親、彼らの子供たち、あるいは彼らの恋人の側からであろうと、愛がなくて寂しく思う無数の人々のために、しかも昇華された性的な状態を有する人々のために、キリスト教は今まで発見して来たのである」、と。それはともかく、ニーチェの〝力への意思〟が自己克服および昇華と不可分に結び付けられている、とわたくしは重ねて言いたい。

ニーチェは、みずからを心理学者および反形而上学者とみなした。そして、彼の力への意思説は優れて心理学的な理論である。ハイデガーは彼を西洋の最後の形而上学者とみなしたけれども、ニーチェは如何なる究極の実在をも信じなかった。彼を形而上学者として描き、このようにして彼の心理学を無視することは、ニーチェ誤解の道に通じると言えよう。ニーチェは彼以前の心理学が深みに欠けることを指摘し、彼よりも前に心理学を形態学および力への意思の発展史として理解しようと考えた人は誰ひとりいないという趣旨の発言をしたあとで、彼の『善悪のかなたに』第1部は、「心理学は、それの奉仕および用意のためにその他の科学が存在する諸科学のクイーンとして承認されるべきである」という彼自身の要求と共に終結する。ニーチェの力への意思説は、心理学的に解釈されるべきである。

ニーチェの心理学説は二つの概念に支えられている。一つは、彼の自己克服ないし昇華の概念である。人間は克服されるべき何かあるものである。一つは、いわゆるルサンチマン(*Ressentiment*)の観念[7]である。ルサンチマンは、力への意思のもう一つの面である。「本来的な反応、行為の反応を拒絶され、ただ想像上の復讐で埋めあわせをする、そ

のような人々のルサンチマン(恨み・遺恨)」によって生み出された奴隷の道徳(『道徳の系譜』I・10)に関して、彼は雄弁に論じている。高貴な人間は力強いゆえ、「たちまちに、他のなかに深く埋められている多くの害虫を振るい落とす」(同上)のである。ルサンチマンから解放されているので、そのような人は自己の敵を尊敬し、愛することさえ出来る、と彼は言う。『ツァラトゥストラ』(第2部「毒蜘蛛」)において、「なぜなら、人間が復讐から解放されるべきであるということ、それがわたくしにとって最高の希望への橋であり、長い悪天候のあとの虹であるから」、とニーチェは宣言した。もしもデカルト以降の近代哲学が考察されるとすれば、それは宗教からの解放の物語として理解されるべきであろう。彼は、宗教と完全に絶縁した最初の思想家の一人である。キリスト教の根底には、病んでいる人の恨み、健康な人、健康そのものに向けられた本能がある——これが、『反キリスト』におけるニーチェの主要モチーフである。彼は、キリスト教をルサンチマンの宗教として理解している。ルサンチマンからの解放を力への意思にとって不可欠と考えるニーチェにとって、キリスト教に対する攻撃はどうしても避けられないのである。結局、ニーチェは、〝反キリスト〟として運命づけられざるを得ないのである。

ニーチェに精通している人々は、彼のルサンチマンの分析が心理学に対する主要な寄与であることをよく知っている。ニーチェはルサンチマンの宗教であるキリスト教をルサンチマンからの解放運動としての仏教と対照させ、キリスト教を駆り立てる力がルサンチマンであるのに反し、仏教をルサンチマンと戦う反ルサンチマンの宗教として特徴づけた。すべての人の求めるものは快楽ではなく力である。そして人が何を求めようと、それは力のために求められる。力への意思——それは、自己自身を克服し、ルサンチマンからみずからを解放しようという高貴な意思である。人間とは、克服されるべき何かあるものである！

3 基本的な問題への道としての心理学

形而上学上の基本問題を、ニーチェは心理学的に解決しようと企てた。ニーチェは、「われら神を畏れぬもの、反形而上学者」(『道徳の系譜』Ⅲ・24)という表現を用い、神が真理であることを説くプラトン的ならびにキリスト教的な〝真理〟を徹底的に否定する。ニーチェによれば、神は真理でもなければ、真理は神的なものでもない。「しかし、まさにこれがますます信じられなくなれば、もしも誤謬、盲目、嘘でなければ、何ひとつもはや神的ではないことが証明されれば――もしも神自身がわれわれのもっとも長い嘘であることが証明されるならば、どうであろうか？」(同上)――このようにニーチェは問う。

『偶像のたそがれ』(「哲学における理性」5)において、ニーチェは次のように述べている――「われわれが言語の形而上学の基本的な前提、やさしく言えば、理性の前提を意識にもたらす時に、われわれは粗野な呪物崇拝の領域のなかに入るのである。それは至るところに行為者および行為を見る・・・それは〝自己〟、存在としての自己、実体としての自己を信じ、自己である実体に対する信仰をすべての事物に投影する――それは、それと共に初めて〝事物〟の概念を創造する・・・存在は至るところで原因として思考によって投影され、下に押し込まれる。〝自己〟の概念から初めて、それから派生されたものとして、〝存在〟の概念が続いて起こるのである・・・われわれはまだ文法を信じているのだから、われわれは神を除いていないのではないか、とわれわれは恐れる」と。

ニーチェによれば、存在は「空虚なフィクション」(「哲学における理性」2)であり、単なる言葉にすぎない。『ツァラトゥストラ』(第3部、帰郷)において、ニーチェはこのことを「ここでは、すべての存在は言葉になることを欲する」と述べている。存在と同じく、それを派生させるものとしての自己(*Ich*)もまた、ニーチェによってフィクションと

して理解されたのである。自己に対する信仰は迷信である。現象の背後に存在する〝本来的自己〟は、本来、存在しない。自己に関してニーチェは『偶像のたそがれ』(「四つの大きな誤謬」3)において次のように言っている――「それは作り話、フィクション、言葉の遊びになった」と。唯一の存在としての自己に対する信仰は、論理に対する信仰と共に存続し、倒壊する(『力への意思』セクション519参照)。それゆえに、ニーチェは言葉の遊びとしての〝自己〟を理解したのであり、終局的に彼は自己を否定せざるを得なかった。

自己の観念が古代の霊魂観と結び付けられていることは否定出来ない。『善悪のかなたに』に対する序文において、霊魂に対する迷信が主体および自己に対する迷信として今日においても災いを生じるのをやめないことを、ニーチェは示唆する。そして、このような迷信に基づく独断的な哲学は、ニーチェによればアジアのヴェーダーンタ説、ヨーロッパのプラトン主義である。[8] ニーチェによれば、プラトンは純粋精神および善を捏造したのである。このようにしてプラトンは西洋の形而上学のルーツになった。『善悪のかなたに』のこの有名な序文において、ニーチェはキリスト教を民衆のためのプラトン主義として特徴づけている。真実の世界、本来的自己、あるいは変化しない存在――これらはすべて人間の思考によって投影されたもの、あるいは同じことだが、嘘に他ならない――このようにニーチェは宣言したのである。自己がそれ自身において存在することを、ニーチェは断固として拒絶した。〝自己〟は思考によって定立される(『力への意思』483)。つまり、自己は思考によって投影されたものに他ならない。〝わたくしは考える〟という文句に何か直接確実なものが横たわっている、と人は考えるかもしれない。確かにデカルトはそのように考えた。しかし、このことからニーチェは「この〝自己〟は思考の所与の原因である」と推論しなかった。一般に、われわれは思考の背後に思考しつつある主体を想定しがちである。しかるにニーチェは、このような因襲的な思考方法を拒絶した。彼は『力への意思』480において次のように言っている――「思考が存在する。それゆえに思考しつつあるものが存在する。これがデカルトの論証の結末である。しかし、そのことはすでに〝ア・プリオリに真実として〟実

体概念に対する信仰を定立することを意味するのであり、思考が存在する時には〝それは考える〟という何かあるものが存在しなければならないということは、単純に一つの行為に対して一人の行為者を仮定する、われわれの文法的な慣習の一公式である」と。そして、このパラグラフの終わりにおいて、ニーチェは「しかし、デカルトが欲したのは、思想が単に見せかけの現実だけを有するのではなく、それ自身における現実であるということである」と結論している。つまりニーチェは、言語の形而上学に基づく自己に対する信仰を嘘とみなして断固としてそれを拒んだのである。

『力への意思』529において、途方もない過失というテーマの下に、意識に関するニーチェの遺稿が整理されている。ニーチェによれば、意識の不条理な過大評価から〝精神〟あるいは〝魂〟のような存在が作られるのである。そして意識が過大評価される時、それは最高の到達され得る形態、至高の種類の存在すなわち〝神〟として現われる。〝真理の世界〟は精神の世界として、意識の事実によって近づくことの出来るものとして現われる。ちなみに、シャンカラのヴェーダーンタにおいては、〝認識は存在に他ならず、存在は認識に他ならない〟(*sattaiva bodhaḥ, bodha eva ca sattā, Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya*, III, 2, 21)と説かれている。シャンカラによって〝認識〟(bodha)と称せられるものは、われわれの言語においては〝意識〟を意味する。ニーチェの眼から見れば、シャンカラの哲学はますます意識的になろうとする性質の哲学である。シャンカラを含め、因襲的な形而上学者の眼から見れば、「無意識になることは欲望および感覚に陥ること――獣になること――とみなされた」(『力への意思』529)のである。しかるに、意識が元来人間の個人存在に属しないと考えて、ニーチェは「増大しつつある意識は一つの危険である」(『陽気な学問』354)と宣言した。古代の哲学者に関して、ニーチェは次のように評している――「意識は高次の、最高の状態であり、完全さの前提であるという彼らの誤った前提に基づいて、彼らは首尾一貫していた――その反対が真実であるのに――」、と。

『道徳の系譜』(I・13)において、ニーチェは「行為、作用、生成の背後に〝存在〟はない。〝行為者〟は行為に対

して単に付け加えられたフィクションである――行為がすべてである」と言っている。[9] 行為者を行為に還元するという思考方法はニーチェと共に始まったわけではない。そのような思考方法は、古代インドにおいて仏教徒によって久しい以前に先取りされている。それはともかく、このようなニーチェの発想が容認されるとすれば、神の存在はこれを限りに否定されねばならない。現実に神が存在するとすれば、それはわれわれによって到達され得る意識の最高の形態であると言えよう。しかし、もしもそうだとすれば、意識はニーチェによって否定的にしか評価されないであろう。〝神は死んだ〟(Gott ist tot)というニーチェの宣言は、われわれによって神が作られ、われわれによって神が殺害されねばならないことを示唆する。つまり、神はわれわれの最高の意識である！　ツァラトゥストラの口を借りて、ニーチェは次のように言う――「ああ、あなた方、兄弟たちよ、わたくしの創ったこの神は、すべての神々のように、人間の作品であり、人間の狂気であった！」(『ツァラトゥストラ』Ⅰ・3「背後の世界について」)と。更に続けてツァラトゥストラは語る――「彼は人間であった、そして、人間と自己のかわいそうなひと切れにすぎなかった。わたくし自身の灰と火のなかから、この幽霊はわたくしのところにやって来た。そしてまことに！　それは、あの世からわたくしのところにやって来たのではない！　わたくしの兄弟たちよ、何が起こったのか？　わたくしはわたくしを、苦しんでいるわたくしを克服した。わたくしは、自己自身の灰を山へ運んだ。もっと明るい炎を、わたくしはわたくしのために発明した。そして見よ！　その時に、その幽霊はわたくしから退散した！」、と。

神は死んだというニーチェの文句に関してかならず引き合いに出されるのは、『陽気な学問』343の次の文章であろう――「最大の最近の出来事――〝神は死んだ〟、キリスト教の神に対する信仰は信頼に値しないようになった――は、すでにそれの最初の影をヨーロッパに投げ掛け始めている」と。ニーチェは意識の最高の形態としての神の存在を否定し、あの世を否定する。神の死と共に、あの世の否定はニーチェのもっとも重要なモチーフの一つである。神は存在しない。しかるに、われわれは神を発明した。あの世は存在しない。しかるに、われわれはあの世を捏造した――

このようにニーチェは考えた。〃あの世〃を原初の時代に最初に仮定させたものは一体、何であったのであろうか？——この問いに対して、それは「衝動あるいは欲求ではなく、特定の自然の事象の解釈における誤謬、知性の困惑であった」と、ニーチェは答えている。

ニーチェの基本的なテーマ、例えば、力への意思、超人、永遠の回帰、宗教、および形而上学はすべて心理学的に解釈し得るというのが、わたくし自身の考えである。神の死を宣告したニーチェが神に代わるべきものとしてわれわれに提示したのは、〃超人〃(*Übermensch*)である。神は死んだ。神の影、それさえも、われわれは除去しなければならない。新しい神の復活は無用である。われわれ自身が神になることも、もちろん、論外である。われわれは、死を免れない自己を克服しなければならない。なぜなら、人間とは克服されるべき何かあるものであるからである。

結　論

ニーチェの著作のなかには、深層心理学的な洞察が豊かに見いだされる。彼は、実に、深層心理学の先駆者である。フロイトは彼の遺産相続人である。なぜなら、フロイトのなかにはニーチェの思想が少なからず見いだされるからである。〃汝自身を知れ〃という格言と対照的なのは、〃あなたは、あなた自身であるものになるべきである〃(『陽気な学問』270)という彼の文句である。しかしながら、ニーチェの自己自身の知識は、もっぱら彼自身の心のなかへ飛び込むこと、すなわち、内省によって得られたのである。[10] それは、フロイトのように臨床的な実験によって得られたのではない。ニーチェ自身の直観および洞察は、フロイトの観察と実験あるいは科学的な自分分析と比較され得ないであろう。例えば、ニーチェは夢の重要性を直観し、過失の意義を理解し、自己自身のなかにノイローゼの意味を認識した。けれども、彼はこれらの心的現象に含まれている〃力学〃(Dynamik)を体系的に考察しなかった。人間の精神生活

をこのような力学の新しい形態として分析しようと企てたのはフロイトである。フロイトは、独力で精神分析という新しい心の科学を創始した。フロイトほど深く人間の心を探究した人はいない。しかしフロイトの少なからぬヴィジョンは、ニーチェによって先取りされている。人間の行為にとって決定的なのは意識ではなく、それの根底に横たわっている無意識である。[11] そして人間の心の深みにあるのは、無意識の領域から生じる〝衝動〟である――これは、フロイトの心の発見である。しかし、このような発見は、すでにニーチェによってなされている。衝動あるいは欲望が人間を駆り立てるエネルギーであることは、すでにニーチェに知られていた。性的な衝動の意義をニーチェは評価したけれども、フロイトのようにそれを最重視しなかった。ニーチェの場合には、外に向けられない衝動は内面に向けられる。攻撃的ないし自己破壊的な衝動がニーチェによってしばしば言及される所以(ゆえん)である。そしてフロイトによって防衛のメカニズムと称せられるもの、特に昇華(Sublimierung)および抑圧(Hemmung という名称の下に)などの心的プロセスを、ニーチェはよく知っていた。ルサンチマン(Ressentiment)がニーチェによって発見されたことは、すでにわたくしによって言及された通りである。

ニーチェによれば、意識は〝病気〟(eine Krankheit)である(『陽気な科学』354)。しかるに神は、ニーチェの眼から見れば意識の最高の形態である。それゆえに、神は死なねばならなかった。神は人間の意識によってこの地上に投影されたものであり、生きている存在ではない。それは一つの推測である(『ツァラトゥストラ』II「至福の島で」)。もしも存在と生が同一であるとすれば、そして存在と生のもっとも内部の本質が力への意思であるとすれば、みずから生成する能力を有しない存在者が真に存在するはずはない。つまり、〝神は死んだ〟と言われる所以である。しかしながら、人間は生きている〝存在〟である。いや、人間は存在しない。彼は今ここで生成し、没落するだけである。しかし生成の背後には如何なる神も、如何なる自然も存在しない。しかも人間が生成するとしても、彼は一つの目標あるいは目的へ向かって生成するのではない。すべては本質もなく、意味もなく、価値もなく、目標ないし目的もないのであ

る・・・もちろん、神も存在しない。生成のかなたに存在(Sein)はない。すべては、絶えることのない流れのなかに見いだされる。それゆえに、ニーチェは『力への意思』617において、「生成に存在の性格を刻印すること――それが力への最高の意思である・・・一切は回帰するというのが、生成の世界の存在の世界へのもっとも極端な接近である――それが考察の極致である」と書いている。

ニーチェの〝神は死んだ〟というあの有名な文句は、過去の神話の世界の崩壊をわれわれに告げたのである。ある人は言う――神の死は神話の死である、そして神話の死は、科学および歴史の勝利である、と。しかしながら、神の死は同時にプシュケーという名の人間の魂の死をも伴うのである。死後に人間の身体から抜け出し、いつまでも存続する魂あるいは心は、どこにも存在しない。[12] 存在するのは、われわれの身体あるいは行為のシリーズだけである。いや、それらでさえ、存在するとは言えないかもしれない。今ここで生成しつつある出来事あるいは日常的な変化だけが、唯一の現実である。時間の流れのなかにしか生成し得ない人間の心理を、深層心理学的にニーチェは考察したのである。ニーチェの心理学は、人間性の実験と称せられるかもしれない。しかしニーチェは、フロイトのように科学的な訓練を受けた医者ではなかった。ニーチェの偉大さは、洞察に富む預言者およびモラルの痛烈な批判者としてのそれである。心理学、特に精神分析に対するニーチェの寄与を、わたくしはこの論文において強調しようと試みたにすぎない――

〝あなたは、あなた自身であるものになるべきである〟――ニーチェ

(1) 西洋哲学史に関しては、わたくしの『西洋哲学史』(北樹出版、一九八九年)参照。

(2) フロイトに関しては、わたくしの『ジークムント・フロイト』(勁草書房、一九八九年、第1版第2刷)、および『西洋哲学史』二二六―二三三ページ参照。

(3) ニーチェの哲学に関しては、わたくしの『ニーチェと仏教』(世界聖典刊行協会、一九八七年)、および『西洋哲学史』一九八—二一三ページ参照。

(4) ニーチェを優れて心理学者として理解し、彼の心理学への寄与について論じているのは、ウォルター・カウフマンの *Discovering the MIND* Volume Two *Nietzsche, Heidegger, and Buber*, McGraw-Hill Book Company, New York, 1980 である。

(5) Kurt Rudolf Fischer, *Nietzsche und das Zwanzigste Jahrhundert: Existentialismus. Nationalsozialismus. Psychoanalyse.* Wiener Kreis, Wien, 1986, p. 41ff 参照。

(6) Unsere Triebe sind reduzierbar auf den Willen zur Macht, *Die Unschuld des Werdens Der Nachlass*, Zweiter Band, Kröner Taschenausgabe, Band 83, p. 287.

(7) 『ニーチェと仏教』三六ページ以下参照。

(8) 真実の世界が作り話にすぎないというニーチェの考えは、『偶像のたそがれ』のなかの〝どのようにして真実の世界は遂に作り話になったか——ある誤謬の歴史〟において簡明に要約されている。このセクションを、わたくしはドイツ語の原文から完訳した(『ニーチェと仏教』一二二—一二三ページ)。

(9) ブッダゴーサの『ヴィスディマッガ』(16、19。II、五一三ページ)において、「・・・行為者は存在しない、しかし行為は存在する」と述べられている。

(10) Bruch Mazlish, Freud and Nietzsche, *The Psychoanalytic Review*, Vol. 55, No. 3, 1968 からのリプリント、三七〇ページ参照。

(11) 「兵士が訓練するように、そのように人間は行動することを学ぶべきであろう。実際に、この無意識はあらゆる種類の完全さに属する」——『力への意思』セクション430。

(12) ニーチェは身体を欺瞞であるとみなさない。それと同時に、魂は消滅すると、彼は考える。『ツァラトゥストラ』のなかのツァラトゥストラの序言(6)において、彼は次のように言っている——「あなたの語るものはすべて存在しない。悪魔も地獄も存在しない。あなたの魂は、あなたの身体よりももっと速く死んでいるであろう。だから、あなたはもはや何ものも恐れ

るな！」と。あの世におもむくはずの魂が身体よりも速く消滅するとすれば、あの世あるいは死後の生が存在することは不可能であろう。われわれの心あるいは言行は、今ここで時間の流れのなかで探究されるべきである。

＊　＊　＊

この論文におけるドイツ語からの翻訳は、すべてわたくし自身のものである。ここでわたくしの使用した原典は、*Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, Hrsg. von Giorgio und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1967-1977 である。しかしニーチェの遺稿に関しては、*Friedrich Nietzsche: Der Wille zur Macht*, ausgewäht und geordnet von Peter Gast unter Mitwirkung von Elisabeth Förster-Nietzsche, Kröners Taschenausgabe, Band 78 を使用した。なお、彼の遺稿集として、わたくしは *Die Unschuld des Werdens: Der Nachlass*, 2. Teil も部分的に利用した。『力への意思』がニーチェの主著でないことは言うまでもない。それは断片的な遺稿集にすぎない。